

## 『おのがデモンに聞け』をめぐって

谷口将紀

ご紹介いただきました谷口でございます。

動画をご覧になる方のために、自己紹介をさせていただきます。東  
京大学法学部に勤めているために、この研究会にお招きをいただきま  
した。ただ、今日はアウエーのグラウンドでプレーをしている心持ち  
です。私が東大法学部で担当しておりますのは、一九九一年に新設さ  
れた現代日本政治論という分野で、私は「丸山学派」ではありません。  
強いて申せば政治過程論の近所になります。京極門下の系譜も引い  
ておりません。政治学史講座を担当していた佐々木毅先生が当時政  
治学講座を兼任されていたために門下に加えていただくことになりま  
したが、その政治学を引き継いだわけでもないので、南原先生から私  
を見ると「分家のそのまた分家」というところでありましょう。まし  
て東大法学部研究室で政治学を学んだ者は、すべからず小野塚先生や  
吉野先生の流れを引くと言われますと、世界のサラブレッドの祖先は  
三頭の馬にたどり着くという話が思い浮かびます。かような次第で、  
私は都築先生の御本で取り上げられている五人の先生方の嫡流として

東大政治学を語る資格はないのです。

### 一 「東大政治学」と「レヴァイアサン」

東大政治学から私がどのように見られているかと言うと、日本政治  
分析を専門にやっていること、京極先生が政治文化論に軸足を移され  
てから法学部研究室内では開店休業になっていた計量分析を中心にし  
ていることから、レヴァイアサン学派に近いと目されているようです。  
『レヴァイアサン』というのは村松岐夫先生、大嶽秀夫先生、猪口孝  
先生が立ち上げられた雑誌の名前で、日本政治研究を政治史や思想史、  
外国研究の片手間で行うのではなく研究の中核に据えられることなどを発  
刊趣旨に掲げていました。大嶽先生は東大の大学院におられたり、三  
人に遅れて編集委員に加わられた蒲島郁夫先生は後に東大法学部で政  
治過程論の教授になられたりした要素はあるものの、レヴァイアサン  
学派が東大法学部に張り合う性格を含んでいたことも確かです。東大政

治学の「伝統」を受け継いでいると自負する法研出身者には、私は東大にいながらレヴァイアサン学派に与する人と映ったのでしょうか。軽蔑のニュアンスを込めて「数学をやる人」とか、「宇宙人」などと呼ばれたこともありました。

それではレヴァイアサン学派からはどう思われていたかというところ、村松先生、大嶽先生、猪口先生、どなたも良くしてください、蒲島先生に至ってはしばしば師弟と間違われるほどに親しくしていただいておりますが、やはりレヴァイアサン創刊メンバーからすると、私は東大法学部の人なのです。例えば、村松先生が日本学術振興会のお仕事をされていたとき、政治学の来し方行く末をどう見るかというヒアリングと呼ばれたことがあるのですが、私を招かれた理由としておっしゃったのが「東大の人の話も聞く」でありました。

事程左様に、東大政治学の伝統を意識している方からはレヴァイアサン学派と見られ、そのレヴァイアサンの編集同人からは東大の人と見られと、インソップ童話のこうもりのように鳥なのか、獣なのか、結局どちらからも疎外される立場にあったわけですね。

もっとも、ここまで申し上げたことを裏返せば、東大法学部における現代日本政治論の初代担当者として、伝統を背負っていない気楽な面もあり、今となっては特段の不都合はありません。既に『レヴァイアサン』も終刊となり、若い人たちからすれば、東大政治学もレヴァイアサン・ムーブメントも、やがて日本政治学史、歴史の一頁になることでしょう。このようなことを考える上で、都築先生の御本は一つ

の座標軸を提供してくださるものですし、標題にもなった南原先生の「おのがデモンに聞け」は力を与えてくれる言葉です。

ただ、私個人を離れて気になるのが、今年の日本政治学会研究大会での遠藤乾さんの言葉を借りれば「専門知への意志的（かつ防衛的）な引きこもり」が進んでいることです。政治思想史、政治理論、政治史、比較政治、あるいは計量分析、数理分析などの専門分化、そして分野ごとの精緻化が進んでいます。それぞれの分野ごとに一定数の研究者がいるから対話が成り立つし、あるいは自然科学や理論経済学のように鍵括弧付きの「グローバル・スタンダード／サイエンス」という大義名分で昇華することもできる。日本政治学の現在位置は、伝統的政治学対レヴァイアサンという二項対立以上に、良く言えば多多元化している、悪く言えばばらばらになっています。

こうしたばらばら感を何とかしたいと思い、二〇年前に、猪口先生、蒲島先生、北岡伸一先生、小林良彰先生、荏部直先生などと日本政治研究学会という学会のような、研究会のような集まりを作りました。我々が住んでいる日本の政治という共通のフィールドで、計量・数理・歴史・思想という様々なアプローチが競い、学び合うことが目的でした。意外に思われるかもしれませんが、レヴァイアサン学派の猪口、蒲島両先生が歴史・思想に学ばねばと言いついて、それに政治外交史の北岡先生と政治思想史の荏部先生が応えたという点を強調しておきたいと思います。今でも近代現代日本政治研究フォーラムという日本政治学会の分野別研究会として続いています。若い人の邪魔に

ならないように、もう運営にはかかわっていませんが、頑張ってもらいたいと思います。

## 二 研究対象としての日本政治

現代日本政治論の担当者として本書を拝読して、改めて思ったのは、どなたも現実政治との距離感をめぐって試行錯誤されてきたことです。七博士事件はやり過ぎとしても、軽々に論壇に立つべからずと言っていた小野塚先生が、実は政治的実践への意欲を併せ持っていたこともそうですし、吉野先生は言うまでもなく、南原先生も貴族院議員や東大総長として否応なく現実政治と切り結ぶことになりました。丸山先生については、三木武夫氏との交流をはじめとして、動画をご覧になる皆様もご存じのとおりです。京極先生も現実政治には興味が無いようなことを書いておられますが、例えば「大平正芳関係文書」を見ると、大平が首相になったときのブレーン候補のリストに「A」評価で載っています。本人が望むと望まざるとにかかわらず、巻き込まれる立場ということですね。

ただ、こうした現実政治とそれぞれの学問をどのように関わらせる——両立させる、ではなく、関連付ける——のかという点については、評論優位のうちに両者を総合しようとした吉野先生や、その孫弟子の篠原一先生などを例外とすれば、戦後長らく「ペンディング」が続いたように思われます。

一九五〇年に創刊された『年報政治学』の第一巻に「日本における政治学の過去と未来」と題する討論会の記録が掲載されています。蠟山政道先生、堀豊彦先生、岡義武先生、中村哲先生、辻清明先生、そして司会が丸山先生と錚々たる顔ぶれです。その中で蠟山先生が、大学では何らかの体系化された学問、そこまで言わなくても政治理論を講義しないと具合が悪いが、学問を体系化するときには、ヨーロッパにおけるそれを模倣せざるを得ず、日本の実情、現実の政治問題と離れてしまう、と問題関心を述べられました。これに対し、丸山先生は日本人の精神構造分析を基礎にして形成した理論なり、学問体系ならば、日本の現実に応用できるはずだという発言をされています。このやりとり在先立つ部分では、日本の政治学の基礎には人間論がないと発言し、これを人文学に引き付けて理解した他のパネリストに対し、宗教や倫理に還元させた人間論ではなく、社会心理学的な、経験的な人間分析とくぎを刺しているのです。恐らくアメリカで起こりつつあった行動科学革命を念頭に置かれていたと思います。

後知恵であることは重々承知なのですが、私の立場からすれば、どうしてこの方針をもっと直線的に、もっと強力に推し進めてくたさなかったのか、言葉を換えれば、一九六〇年の政治学の講義録を尻切れトンボにせず最後まで拝読したかった、という憾みがあります。

一九五〇年代まで政治学政治学史第一講座改め政治学講座を担当された堀先生は、上記のやりとりでは沈黙されていて——というより、人間論がないというくだりで宗教観に引き付けた解釈をして、丸山先

生にやんわり訂正されたのが堀先生——、その政治学の講義もヨーロッパを中心とした近代国家成立史に重点があった、と言われております。

その跡を継がれた岡義達先生の主著である『政治』、そして京極先生の『日本の政治』は、それぞれオリジナリティにあふれる極めて優れた体系書ですが、これも現在のスタンダードで物を言うのはフェアではないことを自覚しつつ、あえて申し上げるならば、第一に比較可能性の軽視、行動科学革命の成果をほとんど無視して——無視というよりは、自己流に消化して言った方が適切かもしれません——独自の理論を立てる意義があったのか。昨年のこの研究会の記録を拝読しましたが、その続きで申し上げると、戦争によって留学の機会を逸した世代ではないのに、国際比較の可能性を犠牲にして独特の理論を構築されたのはなぜなのか。もし両先生が生きておられたら匹夫の勇でおうかがいしたかったところです。そういう意味では、私の選好は伝統的な独自の体系化に憧れ、それを目指しつつも、都築先生が意図されているところよりは先生のおっしゃる「政治学・学」にもう一步寄ったところにあるようです。

第二に実証の軽視、これは必ずしも計量的方法という意味ではなく、既に政治史や政治思想研究が実証性を高めていた点を考えれば、政治原論や政治過程論は些か *Verstehen* に寄り過ぎたのではなからうか。今、「ブラック・ボックス・モデル」の京極先生を *Verstehen* という、大それたことを申し上げましたが、この点は前期京極政治学と後期京極

政治学の連続的側面を重視するか、それとも断絶的側面を重く見るかの違いでもあります。もちろん京極先生の中にも連続的・発展的要素はありますし、更に計量政治学に関しては、京極先生の意図されなかった要因があったにしても、結果的に流れが途切れてしまった。少なくとも私が助手になったころ法研で統計を教えられる人は、行政学・政策学の田辺国昭先生がいらしただけでした。私などは、田辺先生に統計学のイロハを教わり、統計分析の手ほどきは文学部で講義を受け、実習は浅野キャンパスにある大型計算機センターまで足を運びました。今のようにインターネットで調べたり聞いたりすることもできませんから、あとはもっぱら独習です。東大法字部の計量政治学は、一九九〇年代にルネッサンス復興したというよりも再輸入の性格の方が強かったという印象を持っています。

そして丸山先生です。一九六〇年の政治学講義案は、まさしく一〇年前に言われた人間論を基礎とした政治過程分析の試論であり、後期丸山が思想史研究に軸足を移したと言っても、まずは日本人の精神構造分析からという壮大な道程を行かれたものとして理解したいのですが、あの「夜店」発言はしないでいただきたいかったです。

丸山先生の本店Ⅱ思想史研究と夜店Ⅱ現実政治分析を簡単に分離できないことは、二〇一三年の東京女子大学丸山文庫記念講演会で加藤節先生も指摘されています。しかし世間的には、更に言えば東大政治学の少なからぬ部分には、この言葉は、あるいはこの言葉が発せられるより前からの自己韜晦のご様子は、ご本人の意図を超える影響力を

持ちました。少なからぬ人が真に受けたのです。日本政治研究は政治思想や政治史といったホームグラウンドが他にある人——私達の先生、あるいは更にもう一つ前の世代で申せば、佐々木先生や篠原先生——の余技であって、それを専門にするなどあり得ない、あるとすれば岡義達先生や京極先生のように教養の薰りを焚き染めてやるものだという雰囲気、東大の政治学研究会には二〇世紀の終わりごろまで残っていました。

もちろん東大出身者にも、神島二郎先生や松下圭一先生、高島通敏先生などがいらつしやいますから、東大系の政治学者が全く日本政治研究をやらなかったわけではありません。ただ、特に松下先生や高島先生は実践の方に力を入れられたこともあり、例えば法学部内の研究会で「今回の総選挙をめぐって」というような企画をやる時、寄席における色物——落語以外の曲芸——のように「たまにはこんな出し物があっても良い」という風に見られていました。今では面の皮が厚くなりましたが、若い頃は肩身の狭い思いをさせられました。

### 三 行為者としての政治学——「かくなるものと知りながら」

ここまでは現代日本政治をどのようにして研究対象にするのか、という話でしたが、更に歩を進めて、「行為者」としての東大政治学、すなわち政治評論やアドバイザリーにエフォートの相当部分を割くことになった、吉野先生、蠟山先生、矢部貞治先生、そして現在では佐々

木先生に至る系譜があります。もちろん先程申し上げたとおり、丸山先生、京極先生をはじめとする先生方もこうした活動をなさっていますので、あくまで相対的な区分に過ぎません。

これに関して、都築先生が書かれたことで考えさせられたのが、吉野先生の章の最後の部分です。

二つ以上の勢力が対抗関係にあるとき、いずれかがあらかじめ均衡点をめざした主張を掲げると、当の均衡点自体の到達が困難になるということである。吉野が生涯をかけて求めたのは実は普通選挙と議院内閣制だけであつたと言つてもよい。けれどもその要求に反対する吉野のいわゆる「特権階級」のために、実現したのはたかだか政党の腐敗と憲政の常道の短いエピソードだった。(一六二頁)

そこには二つの点が含まれています。

一つには、吉野先生が普通選挙と議院内閣制を追求しながら、はなはだ不十分な形でしか実現できなかったように、政治学者の思い描く理想はなかなか実現できません。比喩的に申せば、統計的検定では五%水準、一%水準などと申しますが、八〇点ではだめだ、九〇点でもまだ足りない、一〇〇点は無理にしても九五点、九九点を目指せというのが学問の世界です。これに対して政治とは妥協の産物ですから、優良可の「可を以て貴し」となさねばなりません。

もう一つは、今のとは逆方向の話で、矢部先生が近衛文麿のブレ-

ンになり、内から軍国主義ないし国家主義を押しとどめようとしたけれども、結局は日本が開戦に向けて突き進んでいくのを防げなかったように、時として現実政治は、政治学者が意図した位置では止まらずに、オーバーランしてしまうことです。

現実政治に関わろうとする限り、一方ではその妥協的性格、成果において足らざる点を批判されます。やつのことと及第の六〇点を取っても、周りからは取り逃した四〇点のほうを、まるで落第であるかのように責められる。更には、今なら政治の困りごとは全て選挙制度改革のせいとされるように、事後延々と政治的帰結を問責される。

これに対して象牙の塔に籠ることも一つの選択肢です。かつて岡義武先生のような学問のやり方があったわけですし、まして今では政治学コミュニティーも広がりましたから、それも決して否定されることではありません。私自身、これまで基本的には「谷口はこういう研究業績を残した」と、百年後に出版されるであろう『続・おのがデモンに聞け』において、一章は望むべくもありませんが、せめて一段落を割いて紹介してもらえそうな本を書くことを、最優先に考えてきました。

他方で、東京大学で現代日本政治論の専攻という看板を掲げておきながら、現実政治に全くコミットしなくて良いのか。日本の民主主義が溺れかけて、助けを求める手を伸ばしているときに、ボートの上から記録写真を撮っているだけで良いのか、と問われたときに、それで良いと答えられないことも偽らざるどころです。

財務省の矢野康治事務次官が与野党の財政政策を批判する論文を発表して議論を呼びましたが、彼は初めに「やむにやまれぬ大和魂」、吉田松陰を引いていました。私が気になったのは「大和魂」ではなく、省略された上の句です。この論文が発表された後、与野党からは矢野批判が相次ぎ更迭論も出ていますが、ご存じのとおり上の句は「かくすれば かくなるものと 知りながら」ですから、矢野さんはもとから覚悟の上だったのでしょうか。まして一介の政治学者が物を申したところで、所詮は螻蛄の斧、批判されるばかりで得るものはありません。それでも「やむにやまれぬ吉野作造」といったところでしょうか。「かくなるものと知りながら」と頭の片隅に醒めた見方を残しつつ、吉野先生にも共感を覚える次第です。

#### 四 アカデミアにおける政治学の位置

御本の最後には、政治学者の大学の管理運営との関わりについて書かれております。特に政治学政治学史第二講座（政治学史）はこれまで小野塚先生、南原先生、佐々木先生と三人の総長を輩出しています。確かに大学本部の仕事をするときに、これまで研究で政治を観察してきた経験が生きることはしばしばあります。現在、東京六大学の総長・学長のうち半分（早稲田・明治・法政）は政治学者が務めているので、こうした見方は私だけのものではないと存じます。

ただ、少なくとも東大法学部については、この伝統は早晚途絶える

でありましょう。二つの要因があります。第一の要因は、法科大学院です。法学部と法科大学院を別組織としている大学も多いのですが、東京大学の法科大学院は大学院法学政治学研究所・法学部の中に設置され、法科大学院向けに大量の教員を採用したことに伴い、法律系教員と政治系教員のバランスが崩れました。また、助教からの昇任人事がなくなり、法律系と政治系の教員が同じ釜の飯を食わない、すなわち互いをよく知らないことも珍しくなりました。このため、政治系の法学部長は渡辺浩先生を最後に二〇年近く出ておりません。

第二に、国立大学法人化に伴い、運営から経営へ、学長のリーダーシップ確立のスローガンの下、大学本部組織が著しく拡充されました。現在の東京大学には、総長以下、理事と監事が一〇名、執行役・副学長が六名、理事・執行役ではない副学長が七名、副理事が五名、総長特任補佐が一二名と、株式会社のような組織になっています。建制順で筆頭の法学部長が、学部長会議で総長の傍に座る時代ではないのです。ですから、丸山先生の「法学部長は、いい悪いは別にして伝統的に総長補佐なんです。」——ここでの総長補佐とは、かつての総長特別補佐、現在でいう理事・副学長、すなわち「ナンバー2」を意味されていたと思います——これは、現役の我々からすると昔話です。

二一世紀を迎えて、アカデミアにおける政治学の位置もかなり変わった、ということかと存じます。

## 五 おわりに——未来の「南原君」へ

私が助手になったばかりの頃、助教授に就任された直後の福田有広さん——福田欽一先生、佐々木先生と継承されてきた政治学史講座の担当者で、東大政治学の最も正統な伝承者になるべきだった方——に「政治学史講座は福田、佐々木、福田と引き継がれてきたので、将来は佐々木君という人を後継者にするのですか。」と冗談を言ったところ、福田さんはニコツと笑って「いいえ。私の後継者は南原君です。」とおっしゃいました。福田と佐々木が交互になるのではなく、福田欽一先生の恩師は南原先生ですから、南原—福田—佐々木—福田—南原の規則性だと切り返されたのです。残念ながら福田さんは後継者の育成を本格化される前に夭折されましたが、健在であったなら、そろそろ「南原君」が姿を現しても良いころです。まだ見ぬ南原さんは、政治学や現実政治の未来にどのような一ページを書き加えてくれるのだろうか、政治に英雄待望論は危険と言っているくせに、是非『続・おのがデモンに聞け』の主役を張れる人になって欲しいなどと夢想するところです。

以上、愚にも付かぬ話を長々と申し上げて恐縮ですが、これにてお役目を果たさせていただいたことにいたします。有難うございました。